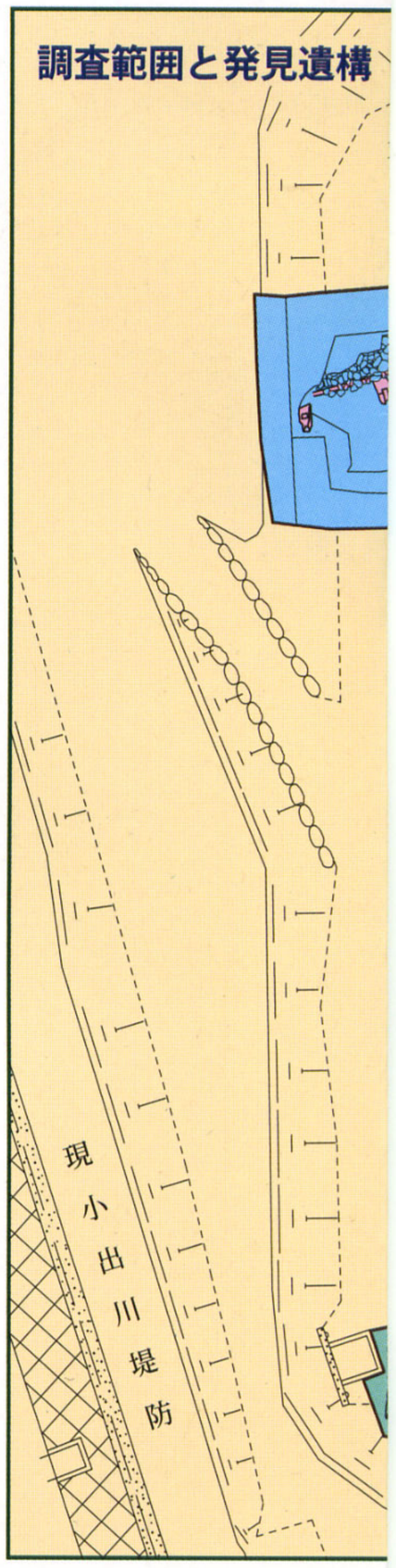
橋脚を見てみよう

橋杭No.1　埋まっていた部分を出してみました。下部は途中から細くなり、手斧という工具で削った痕が残っていました。

どうして橋なの？

今回の調査によって、橋杭は10本残っていることが判明しました。その配置を右の図で見ると、横に3本（橋杭1・9・10、橋杭2・3・4、橋杭5・6・8）が一組になり、縦に4本（橋杭1・2・5・7）が並ぶ規則性がわかります。新たに確認された土留め遺構の性格を加えて考えると、北東側が一方の端で、南東に延びる橋の形が想定されます。



太い木材を加工しました

橋杭はどれもヒノキの太い木を加工して作られています。直径は48～69cm、下部になるほど細く尖っています。残っていた長さで確認できたのは3m65cmでしたが、橋として使われていた時には上にもっと延びていたはずです。

橋杭No.5先端　細く削られた先端は、鉛筆のように尖っていました。

どのように立てたのかはっきりしませんが、大変な工事だったと想像されます。

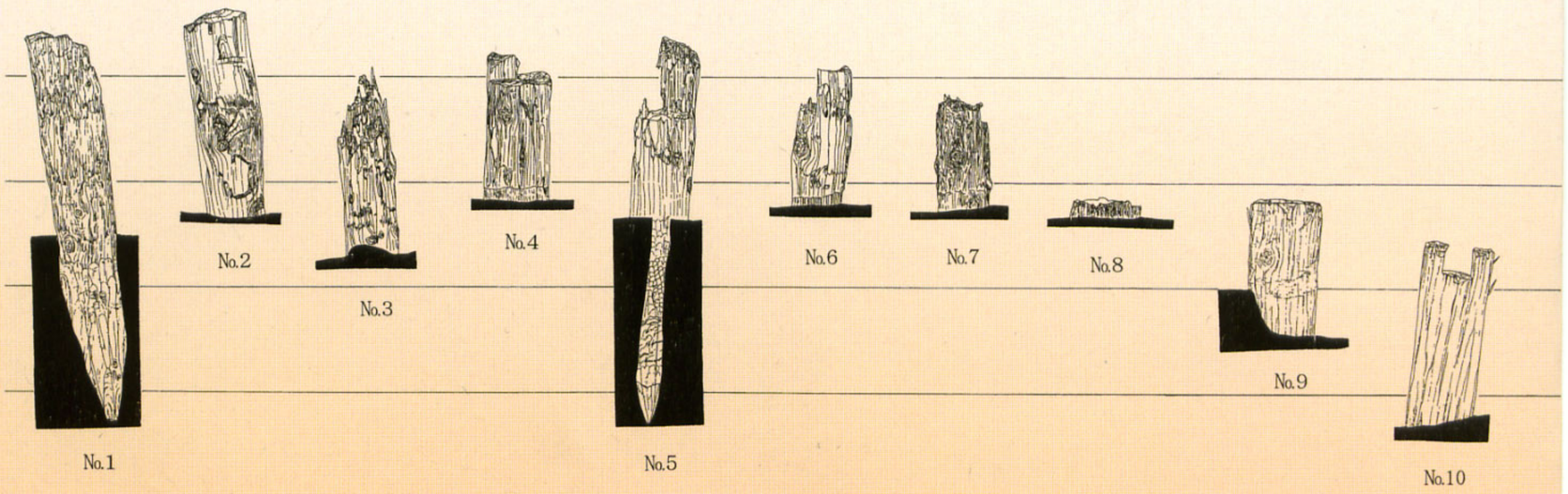
橋杭No.9

橋杭No.10

上部の加工痕　橋杭No.9と10の上部には四角い加工部分があります。これは柱の途中に開けられた穴（ほぞ穴）で、別の木材を通して橋杭をつないでいたと思われます。（最終ページ：絵巻物の橋参照）

橋杭No.4

橋杭No.2



10本の橋杭を並べてみると地中にあった時の高さは不明ですが、現状では2mほどの違いがみられます。これは地震で動いた量の違いと考えられます。（右側の数値は海抜標高を示す